

教育実習とつないで授業実践に必要な知識技術の理解を深める 実践参加型授業の試み

高木 幸子

Examination of mutual effects with regard to the linkage of teaching practice and trial lesson

Sachiko TAKAGI

The aim of this report is to examine mutual effects with regard to the linkage of advanced guidance in teaching practice and trial lesson in home economics education methodology.

The results summarized as follow;

- (1) Students recognized the trial lesson was training.
- (2) Students get at the truth of student's condition through their teaching practice. As a result, they could plan their better lesson plan with confidence.
- (3) It is important to link both experiences intentionally for getting better practical teaching ability and to make their purpose of experience clear.

Keywords : *teaching practice, trial lesson, home economics education methodology*

はじめに

社会の変化とともに、これまでよりも教員には多くの力が期待されるようになった。とりわけ学校教員養成学部に対しては、学士段階で教員に必要とされる必要最小限の力を身につけさせることが求められており、中でも、授業指導力の養成はますます強くなっている。

筆者は、2004年度から、家庭科授業の理解や教授技術等の習得を目的に、授業構想や模擬授業を行う経験を組み込んだ授業プログラムを試行してきた。そこでは、学生は実際に模擬授業を行うことで知識や技術の

不足を理解し、教材研究の重要性を認識していた。また、家庭科授業について、課題や課題改善の方策を検討することで、家庭科授業のありようを考えていた^{1)~3)}。

学校現場でも通用する授業に近づけるためには、一般的に用いられている教材や活用法の基本を理解し、現実的な生徒の反応を踏まえてその指導法を身に付ける必要がある。しかし、これまでは教育法の授業を、生徒への直接的な働きかけが経験できる教育実習と並行して行っているにも拘わらず、意図的な連携をせずにそれぞれを進めていた。

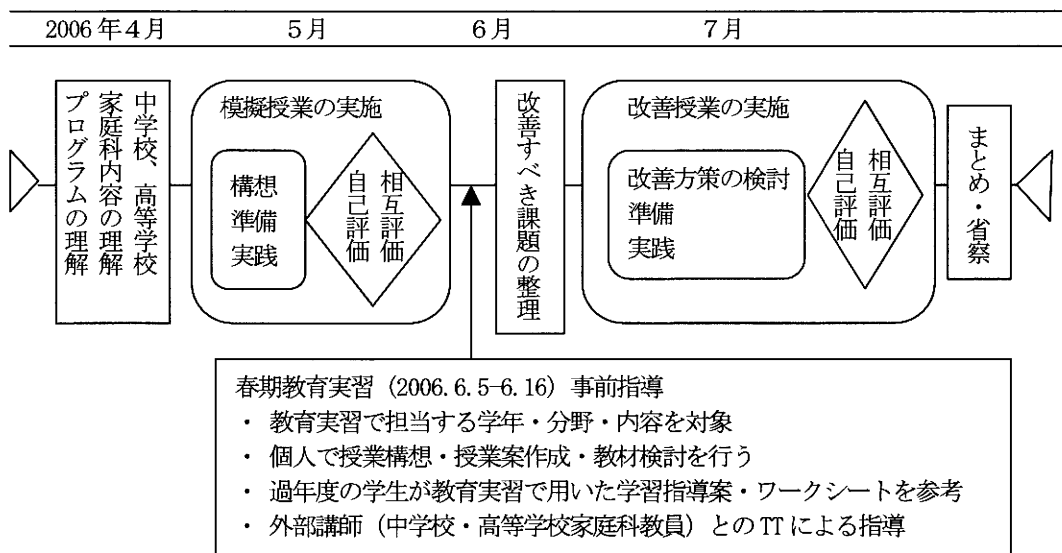


図1 家庭科教育法授業と教育実習事前指導の関連

そこで、2006年度は家庭科教育法の授業を教育実習の事前指導と連携させて進め、学生がそれぞれの経験をどのように位置付けてとらえるのかを検討した。以下に、その結果を報告する。

1 家庭科教育法授業と教育実習事前指導の内容

試行した中等家庭科教育法Ⅲのプログラム(図1)は、教育実習(春期)をはさんで2度の授業経験の場を設定している。1度目(以下、模擬授業と記す)は授業を構想し実践すること、2度目(以下、改善授業と記す)は1度目の授業で認識した課題を改善することが目的である。また、授業を進めるにあたっては、これまでの実践から授業づくりに取り組む際に、習得したい力を指標として意識させて進めた方が家庭科授業のみとりが深まるという知見を得ている³⁾ことから、プログラムの導入の段階で習得したい力として10の指標(図2)を提示した。

なお、教育法の授業で模擬授業や改善授業として実際に授業を行う時間は15分程度の短いものであるが、学生にとっては初めての授業を経験する場である。また、この経験のすぐ後に、小中高等学校での2週間の春期教育実習が控えている。

そこで、本実践においては、模擬授業を教育実習に向けて家庭科授業を行うための基本を学ぶ場として、教育実習の事前指導を家庭科教育法での学びを活用する場として位置付けた。そのため、家庭科教育法の授業で学生に取り組ませる授業構想の内容は、事前に把握しておいた春期教育実習で多く行われる分野・内容を対象とし、2、3名のグループを編成して学生間で協議・検討をしながら進めていけるようにした。

また、教育実習の事前指導(中等家庭科として:90

[授業構成力に関わる指標]	
1. 適切な目標を設定できる	(a)
2. 適切なレベルの内容を設定できる	
3. 目標を達成する指導過程を考えることができる	
4. 適切な時間配分ができる	(c)
[教材研究力に関わる指標]	
5. 教える内容に必要な知識や技術を身に付けている	(d)
6. 指導過程に対応したワークシートを作成することができる	(e)
7. 生徒の理解を支援する資料や教材を準備することができる	(f)
[授業展開力に関わる指標]	
8. 正しい言葉遣い、わかりやすい説明を行うことができる	(g)
9. わかりやすい板書を行うことができる	
10. 生徒への柔軟な対応を行うことができる	

()内の記号は、2005年度実践と比較する際の対応を示す。

図2 学生に提示する10の指標

分×2コマ×3回)では、事前に学生が配置校の家庭科担当教員に確認しておいた実習で行う授業の内容を対象とし、教育実習を想定して個人で進めさせた。その際、過年度の学生が実習校での研究授業用に作成した学習指導案を収集して取りまとめた指導案集(約70の指導案とワークシートのセット)を自由に閲覧できるようにした。また、第2回、第3回の事前指導時には、外部講師として中学校、高等学校の家庭科教員各1名に参加協力いただき、筆者とチームティーチングの形態で学生の作成する授業の構想や指導案について個別指導を行った。

2 模擬授業、改善授業を通じて学生が認識した課題

模擬授業後に、改善が必要だと感じた点について相互評価を行い記述内容別に分類した(表1)。その結果、改善が必要な点として目標の設定や、扱う内容やレベル、時間配分などの授業構成力に関する記述数が、他の教材研究力や授業展開力に関する記述数よりも有意に多く見られた。この結果は、前年度(2005年度)の実践結果と同様の傾向を示していた。具体的な記述を見ると、初めて授業を行ったりその授業を生徒として受けたりする模擬授業経験により、教える内容のレベルや指導の流れ、時間配分などが主な課題として捉えられていた。

また、改善授業後に改善が難しいと思われた点について自由記述による相互評価を行い、記述内容別に分類した(表2)。その結果、授業構成力に関する記述数が、教材研究や授業展開に関する記述数よりも多く見られ、この点も前年度(2005年度)の実践で得られている傾向と同様の結果であった。これらの結果から、学生は模擬授業、改善授業ともに、授業を構成する力を課題ととらえている一方で、資料の準備、指示・発問や生徒対応などの授業を準備し展開する力について

表1 模擬授業後の相互評価の記述内容

(N=12)									
グループ	授業構成力			教材研究力			授業展開力		計
	a	b	c	d	e	f	g	h	
A	7	5	0	0	3	4	4	1	24
B	3	10	2	1	9	3	11	3	42
C	3	16	0	2	0	3	12	1	37
D	4	11	2	3	4	7	8	3	42
E	10	4	1	0	3	1	9	0	28
F	5	7	1	0	4	2	7	1	27
計	32	53	6	6	23	20	51	9	200**
	91			49			60		

**p<0.01

a:内容(目標、範囲)、b:指導過程(流れ)、
c:指導過程(時間配分) d:関連知識・説明指示、
e:ワークシート、f:資料・教材
g:教師の言葉遣い、板書、態度、h:生徒対応

は、課題が改善されていると捉えていることがうかがえた。

表2 改善授業後の相互評価の記述内容
(N=12)

グループ	授業構成力			教材研究力			授業展開力		計
	a	b	c	d	e	f	g	h	
A	4	5	0	4	0	1	1	0	15
B	3	5	3	3	2	1	5	0	22
C	1	5	1	10	2	2	3	0	24
D	0	7	3	0	2	2	6	0	20
E	2	8	1	5	6	1	3	0	26
F	6	5	3	3	2	1	2	1	23
計	16	35	11	25	14	8	20	1	130
	62			47			21		**

**p < 0.01

a : 内容 (目標、範囲)、b : 指導過程 (流れ)、
c : 指導過程 (時間配分) d : 関連知識・説明指示、
e : ワークシート、f : 資料・教材
g : 教師の言葉遣い、板書、態度、h : 生徒対応

3 教育実習と模擬授業の関連に対する学生の意識

(1) 模擬授業経験の教育実習への役立ち感と要望

春期教育実習の終了後に、模擬授業経験が教育実習で授業を行う際に役立ったと感じた点について調査しその記述内容を分類した(表3)。また、教育実習の経験を通じて、模擬授業実習に入れてほしい内容の要望を調査し内容別に分類した(表4)。

その結果、学生は模擬授業の経験に対して、声の大きさや指導案の書き方、生徒への対応など、教育実習に向けて教壇に立つ練習や授業を行うために必要な教授技術を理解する点で役立ったと捉えていた。

一方、教育実習の経験を通して感じた模擬授業への要望については、生徒の発言への対応や授業のメリハリをつける方法、よい発問の方法を学びたいなど、自分が実習の中で直面した問題点を中心に記述され、即時的な解決策を求めていることがうかがえた。

(2) 教育実習経験の改善授業への役立ち感

本プログラム終了時に、教育実習経験が改善授業に役立ったと感じた内容を自由記述により調査し、記述内容を分類した(表5)。その結果、記述は授業を構想する段階、準備する段階、実践する段階別に分類され、授業を構想する段階では、授業の流れが具体的に予想できるようになったことや作業にかかる時間を配分しやすくなったこと、難しさのレベルの判断がしやすくなったことなどが記述されていた。また、授業を実践する段階では、指示の出し方や生徒の質問に対する返答の仕方、声の大きさや板書などについても前よりも予想しやすくなったことが記述されていた。

学生の記述を概観すると、事前指導や教育実習の経験が改善授業に役立ったと感じた場面や内容は様々であったが、2週間の教育実習で生徒と関わり、生徒の反応を肌で感じてきた実感は授業改善の方策を検討する際の不安や方策を決定することへの迷いを少なくしていると思われた。

表3 模擬授業実践の教育実習への役立ち感

1 教育実習の授業を行ううえで、模擬授業の実践はどのよ
うに役にたったか?

(N=12)

分類	記述数	具体的な記述	
全体的な準備	練習	4	一人で授業を行う良い練習になった(2) / 模擬授業で授業をさせてもらったおかげで、あまり緊張することなく授業をすることができた / ワークシートや板書計画などを考える一連の流れを一通り練習できたことが非常に良かった
	知識	3	教材研究の大切さを知ることができた / 実際に授業を行うには、どのような準備や知識が必要か分かった
	授業の仕方	2	他の人の授業を見る事で参考にする事ができた
教授技術	対応	3	生徒の反応を予想しやすく、それに対する反応を考えやすかった(2) / 自分が予想もしなかった質問が出てくると言うことを知れた点
	声の大きさ	2	授業を行う際の声の大きさ
	板書	2	板書計画
	指導案	1	指導案の書き方
	説明	1	作業の説明をする時に、いかにポイントを分かりやすくかつ簡潔に説明する必要があるかの点で役にたった
	立ち位置	1	授業をする時の立ち位置が模擬授業で参考になった

表4 模擬授業への要望

2 教育実習を経験して、模擬授業を行う段階で押さえてお
いて欲しい、触れておいて欲しいと思ったこと

(N=12)

分類	記述数	具体的な記述	
指導の流れ	指導の流れ	3	指導案の書き方 / 授業のめりはりの付け方や効果的な板書の方法などの具体的な手段を多く知る / 単元のどこを中心として案を作ったら良いか
	時間配分	2	時間配分 / 導入の部分にどのくらいの時間配分をすればいいかが分からなかったので触れて欲しい
指示・発問・対応	指示	2	生徒の回答を正答へ導くにはどのような言葉掛けが必要か / 生徒を注目させる指示
	発問	2	よい発問の仕方 / 具体的な発問の仕方について
	対応	1	生徒の突拍子もない発言への対応
授業経験	2	実習に行く前に全員が授業をできると良いと思った(2)	

表5 教育実習経験の改善授業に対する役立ち感

(N = 16)

分類	記述数	具体的記述
授業構想	時間配分	4 班活動だと何か一つの事を誰か代表者がするとなった場合に、誰がやるのかという時点で戸惑っていたので、そう言った部分も考慮して班でレーダーチャートを作成させる時間を少し多めにとった。／子どもの反応や子どもが作業にかかる時間については、教育実習に行ったことで予想しやすくなり、時間配分について少し考えやすくなったと思う。(2)／班活動をさせたり一人で考えさせたりするのにどのくらい時間がかかるのかという時間配分について知ることができ、改善授業を構想・実践するのに非常に役にたった。
	レベル	4 教育実習で実際に中学生に教えることで、中学生に考えさせるには難しいレベルなのかどうかといった教える内容のレベルの判断に役立った。／中学生のレベルを考えながら授業を構想できた。(2)／実際に中学生を目の前に授業をしてきて、中学生の授業時の様子やレベルを考えて改善授業を考えられた。
	授業の流れ	2 中学生とはどのようなものかわからないまま指導案を考えるより試行錯誤して考えられるようになった。／実習前は教師側の一方的な目線からでしか授業を作れなかったが、何となく授業のイメージを湧きつつ構想することができた。／生徒の反応を考えながら授業を構想することができた。(2)／生徒の知識のレベルや反応(質問に対する答え)／実習によって中学生の今の実態を知ることができたので、どこまで丁寧に教えれば理解してもらえるのかなどが何となく分かった。／実際に生徒と触れあったことにより生徒の反応や授業のすすめ具合の予想ができた。
準備	教材	3 ワークシートの作り方(いかに見やすく、分かりやすくするか)／ワークシートや授業展開を作る際にも生徒の書きやすさ、分かりやすさを考えることができた。／実物などに、もっとも生徒の関心を引くことが分かったので改善授業で役にたった。
授業実践	授業の仕方	7 授業の進め方や話し方などが役にたったと思う。／授業のめりはりの付け方／授業を行う上での教師の子どもへの投げかけや、授業のめりはりを付けることで子どもは授業に集中することが分かり改善授業で反映することができた。／どの程度まで詳しく説明する必要があるかを実習前より具体的に考えられるようになった。／導入で題材名や教科書のページを板書するよう指導を受けた点は改善授業で生かすことができた。／改善授業の指導案を作っている時もあんなことを言っていたなあと思い出しながら考えた。／実際の生徒の反応を見れたことで、どのような言葉遣い、声かけをするべきか改善しやすかった。
	指示・発問	3 答える雰囲気、返答の仕方、正答へのもっていき方など、実践段階で役に立つ授業のテクニックなどが身に付けられたと思う。／指示の仕方や発問の仕方の工夫、どのようにしたらいいかということが教育実習前よりも分かったので、授業中のちょっとした動きや言葉かけを気にかけるようになった。
	声	2 基本的なこととして声を大きく、板書を丁寧にしようと思ったこと。／教育実習で声が大きくなり改善授業に生かされた。

4 まとめ

本報告では、家庭科教育法の授業プログラムを教育実習の事前指導と連携して試行することによる相互効果について検討した。

学生は、家庭科教育法で行っている模擬授業経験を教育実習に向かうための基本的な内容・方法を理解する練習の場として捉えていた。そして、教育実習の経験は、授業を改善する際の改善方策を検討する際の判断の迷いを軽減させていると推察された。

本実践では相互に役立ち感が認められた。模擬授業も教育実習も、教員としての力をつけるための実践的な力量形成の場であることに変わりはないが、それぞれの役割を明確にしたことが功を奏したのではないかと思われる。

児童生徒に直接的な働きかけのできる教育実習の経験を、実質的な授業実践力を磨く機会とするためには、教育実習で何を学ぶ必要があるのかを学生自身が理解し、目的をもって参加できるようにすることが重要である。そのために、教育実習に参加するまでの段階で、

学生が教員として付けるべき力や自分に不足している課題を吟味し認識していけるプロセスが必要である。

今回は、中等家庭科教育法Ⅲという1科目での試行であったが、体系的に取り組むことでより多くの効果が得られると考える。

なお、本プロジェクトは、「平成18年度授業改善プロジェクト」の補助を受けた。

〈参考文献〉

- 1) 高木幸子(2007) 家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討(第1報) - 模擬授業実践による学生の課題認識の分析 - 日本家庭科教育学会誌第49号4巻、256-267
- 2) 高木幸子(2007) 家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討(第2報) - 学生が認識した課題の改善への取組と改善状況 - 日本家庭科教育学会誌第49号4巻、268-278
- 3) 高木幸子(2007) 目標の提示による家庭科授業に対する評価内容の変容. 新潟大学教育人間科学部紀要(人文・社会科学編)第10巻1号、49-56